

1年2組

 願いを実現するために考え行動する
 ～ひと・もの・こと とのかかわりを通して～


育ててみたいな 不思議なお花

「世界には『不思議なお花』があるんだって」という話から始めた生活科の授業。それを聞いた子どもたちは、「ひまわりじゃない?」「なにがふしぎなんだろう」「先生、早く知りたい」と口々にしていました。この時、子どもたちの中に『不思議なお花』への興味関心が高まっていきました。

次に、朝顔が紐に巻き付いている写真や、朝顔がトンネルの支柱に巻き付いた写真、花卉でつくった色水の写真など、朝顔の性質（不思議さ）が顕著に表れている写真を子どもたちに提示しました。すると子どもたちは、「うわあ。カーテンみたい」「お花のトンネルだ」「色水きれいでいいな」と自分の中の気付きや思いをつぶやいていました。朝顔という花の面白さ、魅力を知った子どもたち。子どもたちのつぶやきは、さらに続きます。「これ朝顔って言うんだよ」「お花で色比べしたいな」「腕輪を作りたい」「きれいな色水を作りたい」「屋根まで朝顔にしたいな」「家を作って、朝顔ハウスにしたい」。子どもたちの中に、「こんなことしてみたい」「私も育ててみたい」という願いがどんどん膨らんでいきました。Aさんは赤白帽子をかぶり、「早く植えよう」と、はやる気持ちを抑えられずにいました。種を植えるときには何が必要かという話し合いでは、「まず土がないと」「肥料もいれる」「水をあげる」「おひさま」と力強く語っていました。そこで、朝顔が元気に育つための土づくりを行いました。Aさんをはじめ、子どもたちは土を丁寧に植木鉢に入れ、肥料を混ぜ、水をしっかりと染み込ませました。土ができあがり、すぐにでも種を植えたいところでしたが、水が土全体に染み渡るまで少し時間を空けなければなりません。その事実を知ったAさんは、「休み時間に植えてもいい」と尋ねてきました。普段のAさんは、休み時間に大池に遊びに行き、生き物を捕まえたり、池の中で泥まみれになったりして遊んでいます。しかし、この日は、早く朝顔に会いたいという気持ちの方が強かったのです。我慢の末迎えた5時間目の種を植える時間。すでに赤白帽子をかぶったAさんが「ぼくが説明する」と言い黒板



の前に出てきました。そして、「指に線があるじゃん。お母さん指のこの線の一番上の線のところまで穴を掘って、そこに種を入れるんだよ」とみんなに伝えました。その説明を聞いた子どもたちは、自分の人差し指の線を確認していました。後でAさんに「どこで知ったの」と聞くと、「朝顔の種の袋の裏に書いてあった」と教えてくれました。早く自分の朝顔に会いたいけれど、種を植えることができないというもどかしさを感じたAさんは、いてもたってもいられずに朝顔の袋に書いてあった種の植え方を読み込んだのでしょ。そして種を植えることができるようになった今、期待に胸を膨らませながら、獲得した知識をみんなに共有してくれたのです。その後Aさんは真剣な表情で種を丁寧に植えたのでした。

種を植えてから4日後、ついに土の中から朝顔が芽を出しました。Aさんは登校すると、「芽が出る」という友だちの言葉を聞き、ランドセルを机の上に放り投げて、朝顔の様子を見に行きました。そこには確かに芽が2つ出ていました。その日の生活の時間。芽が出た記念日と名付け、朝顔さんの記録をつけてあげることにしました。Aさんはそこに、「めがでてうれしいです。あさがおでとんねるをつくりたいです。あさがおハウスをつくりたいです。でっかいあさがおをさかせたいです」と綴りました。ずっと待ち望んでいた朝顔との出会いに喜びを感じるとともに、この先の自分自身と朝顔の歩みを具体的に想像している姿がありました。



朝顔が芽を出すまでの物語の中で、私が感じたことがあります。それは、探究心に満ちた子どものエネルギーの大きさは、計り知れないということです。Aさんは、ほかの子の朝顔にもお水をあげてくれました。Bさんは、朝顔のお世話をするために、朝の用意をスムーズに終えるようになりました。Cさんは、1日も欠かさず朝顔に水をあげるほど、朝顔のお世話に夢中になっています。朝顔と共に成長していく子どもたち。対象とのかかわりの中で、子どもたちの姿は変容していくのだなと感じさせられました。

「あさがおさんといっしょにあそびたい」

子どもたちは、学校に来るとベランダに飛び出し、朝顔さんの様子を見に行きます。名前をつけた大事な大事な朝顔さんを枯らさないようにと、精一杯お世話をしている姿は、まるで本当に朝顔さんのお父さんお母さんになったかのようです。

そして、教育実習生が朝顔さんを題材に授業をしてくれました。その授業の中で、Tさんが、「(朝顔さんが) おおきくなって、早く一緒に遊びたい」と発表していました。この言葉を聞いて私は、子どもたちが朝顔さんを1つの命として捉えているのではないかと感じました。それは、「一緒に遊びたい」という人間と遊ぶかのような言葉選びからひしひしと感じられました。それと同時に、子どもたちは朝顔さんと一体どんなことをして遊びたいのだろう、そもそも朝顔さんと一緒に遊ぶとはどういうことなのだろう、という疑問が私の中に湧き上がってきました。そこで、子どもたちに尋ねてみることにしました。すると、Yさんが「朝顔のおうちを作りたい」と言いました。もっと詳しく聞きたいと思い、「どういうこと」と問い返すと、「朝顔をお家にくっつけて、みんなで遊びたい」と話してくれました。「一緒に遊びたい」という言葉には、朝顔さんと遊びの空間を共にしたいという思いが込められていることを知りました。また、Rさんは、「台風の時や嵐の時は、朝顔さんを避難させられるようにしたい」と語ってくれました。朝顔さんが安全に育つようにするために、自分たちにできることをしてあげたいと願う姿でした。これらの姿から、子どもたちにとって、朝顔さんが友だちのように、我が子のように大切な存在になっていることが分かりました。

その後、朝顔のお家のことを、「あさがおハウス」と名付け、どのようなお家にするのか、どのように作っていくのか話し合いが始まりました。「教室の中に作れば」「でもそれだと授業ができないよ」「じゃあ外か」「外なら木とか使わなきゃ」「レンガも使う」「レンガ作るの大変だよ」…。子どもたちどうしが言葉を交わし、あさがおハウスの未来を語っていました。話し合う中で「お～」「いいね」というつぶやきも聞こえ始めました。あさがおハウスを作ることが自分事になり、よりよいものを作りたいという願いが高まっていきました。しかし、それぞれの思いが強い分、收拾がつかなくなりました。するとMさんが、「設計図を描けばいいんじゃない」と言いました。あさがおハウスのビジョンを視覚化することで、自分の願いだけでなく、友だちの願いも組み入れた、より良いあさがおハウスを作りたいという思いを感じました。そして描いた設計図。作る材料、色、大きさも三者三様でしたが、階層に着目すると1階建てと2階建てに分かれていました。そこからあさがおハウスの階層についての話し合いが始まりました。



Aさん：2階だと下の人に崩れてきちゃうこともあるし、教室だって2階もないんだし、1階でいいじゃん。上にいっぱい行き過ぎてぎゅうぎゅう詰めになったら下に落ちこちてきちゃうし、もしも誰かがケガしたら助けてくれないもん。

Nさん：納得。

Sさん：納得だけど、2階は朝顔のある部屋で、1階はみんなが遊ぶ部屋ってのはどう？

Kさん：それいいね。

Nさん：いいね。納得。

Oさん：でも、2階に朝顔置くんだったら、もし崩れたら朝顔枯れちゃうし死んじゃうじゃん。

Nさん：2階だったら絶対大丈夫にすればいい。

Tさん：2階にするといっぱい遊べるし

Aさん：え、でも2階は遊ぶところじゃないよ。上からどんどんやったら木がもたないかもしれないよ。

話し合いは難航し、どちらにするか決まらないまま時間が過ぎていきました。そんな中、Kさんが、「図工でやっ

たダンボールハウスで模型を作ってみればいいんじゃない。それで練習して、本番に移っていきたい」と提案してくれました。1階建てと2階建て、どちらにも良さがあり迷っていたNさんも、「それがいい」といい、早速ダンボールがある多目的室に向かっていきました。

こうして始まったあさがおハウスの模型作り。どのようにすれば壁が頑丈になるのか、屋根が崩れないのか、みんなが入れる大きさにできるのか。何度も試したり、話し合ったりしていました。さらに、休み時間にも屋根をつけ直したり、柱を新たに作ったりしています。子どもたちが夢中になっている姿や友達と意見を交わす姿、力を合わせる姿など、本気になって活動に取り組む姿は生き生きとしています。このような子どもたちの姿を大切にしたいなと感じます。



「やっぱり木で作らなきゃだめだね」



ダンボールでの模型作りを始めた子どもたち。ダンボールはなかなか自分たちの思い通りにはなってくれません。一生懸命立てた壁が次の日には倒れてしまっていたり、屋根がつぶれてしまっていたり。その度に、ガムテープで補強をしていました。そんなある日、1階建ての模型の近くにあったパーテーションが倒れ、模型がぺちゃんこになってしまったのです。2階建ての模型も、少し触れただけで倒れたり、1階部分がつぶれたりしていました。それを見たMさんは、「やっぱり木で作らなきゃだめだね」と言いました。頑丈な家にするには、強度が大切であるということに気づいていきました。

夏休み明けには、模型作りで学んだことを生かしながらあさがおハウスの製作に取り組んでいきます。たくさんの気づき、悩み、困り、不思議、達成感を子どもと共に味わっていきたいと思います。